美術科教育学会通信

1997年12月30日発行　　美術科教育学会本部事務局　　Ｎｏ．２７
〒184 東京都小金井市貫井北町４丁目１－１　東京学芸大学
美術科教育学研究室内 ☎0423-29-7608,7610 （ 畑・囘 醺 ）　FAX. 0423-29-7599

発展的なシステム作りに向けて

本部事務局　柴田 和豊

去る10月12日に石川毅先生（学会副代表理事・東京学芸大学教授）が逝去されました。時のたつのは早く、それから少なからぬ時間が流れました。その間、私の脳裏には様々のことが去来しましたが、本学会のありように関することも当然ながら含まれていました。先生の存在は、あらためて申すまでもなく、私たちの学会にとって実に大きなものであったからです。

先生が亡くなられてからの事務局の状況は、これまでの分担体制の組み直しに迫られながらも、即応しかねるという、混乱の中にあったといってよいでしょう。簡単にいえば、増田さんと私の２人では、穴埋めできない状態にあったのです。これまで３人でなら何とかやってこれたものが、２人では仕事の総量をカバーしきれないことがはっきりとしてきたのです。

今日は、そのような事務局を取り巻く様子と、そこから導き出される事柄を率直に記させて頂こうと思っています。愚痴話の中にも、小さな学会に近代的なシステムを根付かせていくための方策を考えるという、一般論的な広がりが含まれていると思うゆえにです。

はっきりいって、私たちはかなり以前からオーバーワーク気味でした。石川先生のご遺族からお伺いした話では、先生は学会誌の編集に関わって、睡眠時間も割いて、身を削るような形で原稿に目を通し、整理に没頭していらっしゃったということです。また、会計担当の増田さんにしましても、少なからぬ金額の入った学会の通帳の管理に、気の休まる時がないという状態におかれています。そして、私の場合も、疲れ切った身体に鞭をうっての深夜の書類作りを何度となく経験してきています。そのような場面で思わず口をついて出る言葉は「学会やめたい」です。

私や増田さんがオーバーワーク気味なのは、もちろん学会事務だけのせいではありません。本務の状況がベースにあることは、いうまでもないことです。東京学芸大学は実に忙しい大学なのです。特にここ２～３年はドクターコースや夜間大学院の開設が重なり、労働条件は厳しくなっていくばかりです。分かり易い例を上げますと、私が関係する入試の類は年に６回にものぼるほどです。ですから、私の胸中では、学会活動からエスケープしたいという願望が無意識のうちに肥大していくのです。

学芸大学に学会事務局を恒常的に置くことにメリットがあることは承知しています。学会のもつ継続性のイメージを強調する点や、学術会議や文部省などへの手続きをする上での便利さは明白です。

しかしデメリットもあるでしょう。一ケ所に固定することで、若い会員層に当事者意識を育むことを阻害しかねないと、危惧されるからです。一部の者が学会を動かしているように感じられている方もいらっしゃるでしょうし、学会は自分たちが作り上げるものとい

う実感をもちかねている方も多いのではないでしょうか。
どちらを強調すべきなのでしょう。
私としては、やはり後者の視点に注意を払いたいと思っています。「人が財産」というように、学会の運営に関わってもよいという人たちを生み出す努力をすべきであり、そのことを妨げかねない要因は取り除くべきなのです。当事者感覚に富む多くの会員の出現ぬきには、学会の発展はありえないのです。

このことと、学会事務局の問題とを重ね合わせてみますと、自ずと一つの結論がでてきます。事務局も持ち回りにするのがよいとの意見です。3～4年周期で事務局をリレーしていくのですが、期間を限定することで、事務上の集中力の向上と、学会運営の経験者の大幅増が見込めるはずです。
しかし、事がすんなりとは運ばないことも、はっきりしています。簡単にそのようにできるのなら、何もこの文章を書く必要などないのです。大多数の人たちは、「スタッフの多い学芸大学でさえ事務局を続けることに苦慮しているくらいだから、規模の小さな大学ではできるはずがない」と考えられていることでしょう。私は学芸大学の状況が恵まれているとは思ってはいないのですが、格段によい状況をそなえた大学が他にないことも認めざるをえない事実です。
それでは、どうすべきなのでしょう。私はやり方は2つあると思っています。ひとつは学会費をかなり値上げしてでも、パートの専従事務スタッフをおくというやり方です。学会役員の事務局員を雑用から解放して、企画に専念できるようにするのです。単純に見積って2,000円の値上げで約90万円の資金ができますが、それで週4日・半日程度のパートが可能となります。スタッフは大学院生でもよいのです。もうひとつは、30人もいる役員に具体的な役割を設定して、積極的に活動してもらうというものです。通信発行、学術会議関連、学会誌発行、シンポジウム担当、会員拡大、他学会との連係等々の課題を具体的にこなしてもらうことによって、事務局の作業量の軽減を図るのです。

両者を組み合わせることができるならベストでしょう。しかし、強いてどちらかを選択するのなら、私としてはまず後者を実行すべきと考えます。各担当役員は、その課題を推し進めるにあたって、ボランティアを組織してもよいのです。そのことには、若い世代の人たちの学会運営への参画を促すという可能性が内蔵されているはずです。
いまこの国の骨格が揺さぶられていることは周知のとおりです。教育もまた例外ではなく、新たな思考方法が求められています。ですが、様々の審議会の委員構成などを見ていますと、基本的には相変わらず年功序列で事は運ばれているようです。残念なことです。ほんとうに新たな考え方が必要というのなら、私たちは新たな思いを抽出する方法に関してもっとデリカシーを示していかねばならないでしょう。

とはいえ、よい機会ですので、私は若手の会員の方々にもお願いをしておこうと思います。もっと発信してほしいのです。学会・美術教育の在り方全般にわたってです。政治の季節といってよい60～70年代に学生生活を送った私には、学会を業績作りの場とだけ割り切るクールな行き方には抵抗を覚えるのです。自ら発する異議申し立てを通してしか世界を変えることはできないと考えるのですが、それは古風にすぎる考えなのでしょうか。
私の脳裏には一つの像が見え隠れします。大学、そして学会で批判をされて去る私と、私たちの世代の姿がそれです。冷笑ではなく、批判によって去っていくことを、私は望みたいのです。さて、本学会の近未来のシステムと、空気はどうなるのでしょうか。

《第３回美術教育史研究部会研究会の報告》

茨城大学　金子 一夫

美術教育史研究部会は、第３回研究会を1997年12月13日（土）に岡倉天心別荘及び日本美術院のあった茨城県北茨木市五浦で開きました。天心旧居及び敷地は、現在茨城大学五浦美術文化研究所になっています。また今年の11月８日に茨城県天心記念五浦美術館が開館し、会館記念展が開かれていました。この機会に当地での研究会を計画したわけです。

午前11時30分すぎから茨城大学五浦美術文化研究所内を見学しました。しばし天心の気分になった後、敷地内の天心旧居、天心記念館、そして研究所前の天心の墓を見ました。

午後から天心記念五浦美術館の講座室で16人出席の研究会となりました。美術館の概要を説明された後、別室で東京美術学校生徒課題画資料を閲覧しました。これは 2,300点余の明治時代の東京美術学校の授業作品です。特に美術学校初期のフェノロサ理論による教材と、西洋画大家の生徒時代の石膏像素描を見せてもらいました。筆で描いた抽象的直線図形の課題画、青木繁、熊谷守一、坂本繁二郎、藤田嗣治の素描は興味深いものでした。

その後講座室での研究発表、そして展覧会見学となりました。上野浩道氏「東京大学教育学部手塚文庫について」と、寒河江文雄氏「東京大学手塚文庫蔵山形県長瀞小学校想画（生活画）」は、去年の研究会がきっかけとなって、東大の手塚文庫から発見された国分一太郎指導の生活画についての発表でした。今回の設定テーマ「美術教育史上のナショナリズム」に沿った発表として、熊本高工氏「フェノロサとアーサー・ダウ」、向野康江氏「明治期における広瀬淡窓の弟子達」、金子一夫「明治期の美術教育とナショナリズム」がありました。時間の関係で向野は要約のみ、金子は文書のみの発表になりました。そして展覧会見学後、磯原駅前で懇親会を午後７時すぎまで開いて研究会は終了しました。

《役員選挙が行われました》

去る12月12日に東京学芸大学において、新役員の選挙の開票が行われ、15名の理事が選出されました。被選挙人458名に対し、投票総数は192票（無効票６）で、42%の投票率でした。なおこの投票率は過去最高です。

開票は、選挙管理委員会の金子一夫（委員長）、竹内博、仲瀬律久、増田金吾の諸氏に宮坂元裕（立会人）、幸秀樹（事務局）の両氏を加え、次のように厳正に行われました。①投票総数の確認　②郵送されたことの確認および日付の確認　③開封　④８名以上記入された投票用紙（無効）の確認２回　⑤氏名を伏せナンバーのみによる得票カウント２回　⑥集計、確認１回。

そして、選挙結果を受けて、12月23日には選出された新理事が招集され、選挙結果ではなく、地域・世代・性別・研究領域・校種などを考慮して選ばれる理事（規約では15名以内）・監事の選出について協議がなされました。新役員は、来年３月の学会総会で承認を受けた後、その任につきます。

《学会誌編集委員会からのお知らせ》

逝去された石川毅編集委員長の職務は、藤江充理事（副編集委員長、愛知教育大学）が代行します。また、目下刊行中の『美術教育学19号』の編集実務は、岡崎昭夫理事（筑波大学）が担当します。なお、学会誌への投稿は常時受付となっていますので、投稿される方は本部事務局まで原稿をお寄せください。

第２０回美術科教育学会（ブレ学会）公開シンポジウム
－リレートーク：大阪のパワフル美術教育は、いま！－

美術科教育学会大会にリンクする「ブレ学会」公開シンポジウムが定着してきています。第２０回大阪大会では「いま美術教育の危機の時代にあって」という問題意識から「フォーラム」などが行われる予定ですが、大会に先だって、大会テーマを視野においたリレートーク式の公開シンポを開催いたします。ふるってご参加ください。

＊主催：美術科教育学会・大阪教育大学（美術科）
＊日時：1998年１月10日（土）午後2:30～5:00
＊会場：大阪教育大学・天王寺キャンパス・講堂（ＪＲ環状線・寺田町駅下車１分）
＊プレゼンテーター：花篤實（大阪教育大学）
＊プログラム：
第１トーク：いま、美術教育の危機的な状況について‥‥いわばポスト・モダンの時代の病理的な現象の中にあって、いま、美術教育は危機的な状況といえる。
パネラー・柴田和豊（東京学芸大学）
第２トーク：何が、美術教育において問題なのか－「造形あそび」以後－‥‥大阪に始まるパワフルな「造形遊び」は、文部省の学習指導要領に入って以後、いかなる展開をみせるか。
パネラー・板良敷敏（文部省教科調査官、元大教大付属平野小学校）
第３トーク：何を、問題にすればよいのか－子どもの現実から－‥‥パワフルな美術教育を再び展開するためには、われわれは、いかなる問題意識から問題をみればよいのか。
パネラー・板井理（大阪市立佃西小学校）
第４トーク：いかに美術教育のヴィジョンをもつべきか－学会に向けて－‥‥危機的な問題状況にあって、いかなる美術教育のヴィジョン、あるいは問題化のヴィジョンをもてばよいのか。学会に向けてリレートークの総括をする。
パネラー・永守基樹（和歌山大学）
＊シンポジウム司会：那賀貞彦（大阪教育大学）
＊コメンテーター：宮脇理（学会代表理事）

学会本部事務局より

○12月上旬に、『美術教育学20号』（1999年３月刊行予定）刊行のための助成金を、文部省に申請しました。約 110万円を申請していますが、昨年の実績が59万円ですので、いかがあいなりますでしょうか。

◎本学会が、文部省学術情報センターの電子図書館サービスに参加していることは既に何度もお伝えしていますが、目下『美術教育学』のスキャナーによる読み込みが行われています。その過程で分かったことですが、学会誌第３号がどうしても手に入りません。どなたかお持ちの方はいらっしゃいませんでしょうか。お持ちの方はご一報ください。